



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ミルチャ・エリアーデ著、奥山倫明（監修）、奥山史亮他（訳）『アルカイック宗教論集：ルーマニア・オーストラリア・南アメリカ』（宗教学名著選第一巻、国書刊行会、二〇一三年）
Author(s)	シュルーター, 智子
Citation	基督教學, 54, 25-28
Issue Date	2019-07-18
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75532
Type	journal article
File Information	02schlueter.pdf



ミルチャ・エリアーデ著、奥山倫明（監修）、
飯嶋秀治、奥山史亮、小藤朋保、藤井修平（訳）
『アルカイック宗教論集 ルーマニア・オー
ストラリア・南アメリカ』

（宗教学名著選第二巻、国書刊行会、二〇三年）

シュルーター智子

本書には、エリアーデがルーマニア時代にまとめた『再統合の神話』（一九四二年）と『棟梁マノーレ伝説の注解』（一九四三年）、そして『世界宗教史』の執筆を前に発表した『オーストラリアの宗教』（英語版一九七三年）と「南アメリカの高神」（一九六九年、一九七一年）の四篇が収録されている。時期的に隔たりのある「中期エリアーデ」（「解説」参照）以前の二篇とその終期の論考二篇は、想定される読者の点でも対照的である。前者が幅広い層に向けた著作であるのに対して、後者は、豊富な脚注と参照文献からも明らかなように、特に宗教学と周辺分野の

研究者を念頭においている。

このような表面上の違いは、内容と筆致においても確認できる。『再統合の神話』は「神の両極性」と「両性具有の神話」の二章からなり、前者はゲーテの『ファウスト』から、後者はバルザックの『セラフィタ』から説き起こされる。『ファウスト』における神とメフィストフェレスの「共感」には「対立物の一致「…」という伝統的、かつ世界的に流布した観念」（十三頁）が、『セラフィタ』の主人公には両性具有という「原初の始原型」（四九頁）が見出され、その両観念が引き続き「アジアとヨーロッパだけでなく世界中のあらゆる場所」（六三頁）から集められた事例に即して確認される。こうして「アルカイックな」宗教経験を縦横無尽にめぐるエリアーデは、論考の終わりにその分析対象を「人間」へと拡張する。

最後に、いかなる人間も意識的であるかは別として、その靈魂のうちに完全性への郷愁を抱いていることに注目したい。そのことを確認するために、愛に直接基づく行動さえも、その根底に、もちろんおぼろげにはあるが、両性具有の体験を有し

ていることを述べなければならない。「…」愛の経験は宗教的経験と同じように絶対性を示しているために、人間はきわめて短時間しかそれを実現できない。「…」絶対的な実在性は、人間が現在被っている制約下では享受出来ないのである。(七二頁)

続く論考『棟梁マノーレ伝説の注解』では、ルーマニアを含む南東ヨーロッパのフォークロア「棟梁マノーレ伝説」を題材に、「あらゆる種類のアルカイックな資料」(九五頁)に基づく分析が進む。「犠牲の死」「非業の死」のモチーフが宇宙創成神話にも共通する「創造的」な死であり、またルーマニア地域では「民族の激動の歴史」(一七九頁)ゆえに伝説が固有の文学作品へと昇華したと論じるエリアーデは、最後に「本稿で考察対象としてきたアルカイックな世界は、われわれの世界と大きく異なるものののだろうか」(一八三頁)と問いかけ、再びその眼差しを「人間」に転じる。

人間は、宇宙における自身の位置を自覚した瞬間に現われた始源型の直観からだけは逃れることができない。楽園に対する郷愁は、近代的人間のもつ

とも下劣な行動のうちにも今なお見出せる。「…」アルカイックな精神性は、解読してきたように有機的であるものを渴望するが、それは現代まで継続している。しかし行為として、人間の真の成就の方法として継続しているのではなく、独立した文化的価値に対する創造的郷愁、すなわち芸術、学問、社会的神秘学などとして継承しているのである。(一八七―一八八頁)

これらルーマニア時代の二論考で展開される、軽やかだが強引でもある論調は、本書後半の二篇では影をひそめる。かわりに見られるのは、同時代の研究者や学説史との対峙であり、扱われる題材も「宗教(史)学的」性格が色濃い。『オーストラリアの宗教』の冒頭では、アボリジニが有する「原初存在の類型と構造」をめぐるホイットやラング、シュミットらの議論と、後にデュルケムらの研究により関心がトーテミズムに移り、ペッタツォーニらの「数は少ないが重要な作品」が顧みられなくなる、その経緯が回顧される(二三七頁)。なお、エリアーデ自身を学説史に位置づける上で注目されるのは、一九

六〇年代のリバイバル運動に関する分析である。この「土着主義的で千年王国的な運動」は、「単なる経済的、政治的状况よりも神秘的なノスタルジアに関係」しており、「文化変容によって提起された課題に対して創造的に、そのため多様に反応」したことに起因すると論じられる（三五〇頁）が、解題によるとこの結論は『『聖と俗』で打ち立てたモデルの前提の誤り』に気づいたエリアーデが「資料にいま一度真摯に取り組み、「始源」を「創造」へと読み替えた」ことを示すものであるという（四八三―四八四頁）。

本書の最後に収録された「南アメリカの高神」では、「宗教史家」として「とりわけ力を発揮できる研究領域」（四二二頁）である南アメリカの諸部族の資料から、超自然的存在と儀礼および儀式についての紹介と分析がなされる。デオス・オティオスス アクシス・ムンディ「ひまな神」「世界軸」「ヒエロファニー」など、これぞエリアーデという趣の概念が散りばめられているが、それらの概念は資料を理解するための補助線として控えるに配置されている印象がある。

以上の四論考で扱われる題材は、実は、他の著作の中

でもくり返し論じられるものである。たとえば『再統合の神話』は二〇年近くの時を経て改稿のうえ『悪魔と両性具有』（原書一九六二年、邦訳一九七四年）に収録されており、「棟梁マノーレ伝説」は一九七〇年に出版された『ザルモクシスからジンギスカンへ』の第五章「マノーレ親方とアルジェシユ修道院」（邦訳一九七七年）などでも扱われている（「解題」参照）。これらの題材が異なる時期にいかに関わっているかを比べてみることで、エリアーデの学問を辿り、その可能性を読み取ることもできるだろう。

本書の論考ではまた、題材だけでなく、既視感のあるエリアーデ特有の概念がここかしこで、まるで広げた地図に目印をつけるかのごとく用いられる。性急な読者はこうした目印だけを集めてその地を征服したと思うかもしれないが、しかし、たとえばすでに「エリアーデ宗教学」に触れたことのある読者が本書を気長に読み進めるなら、その目印は、外国の土地で出会う馴染みある言葉で書かれた標識のようにも思えるだろう。それらの概念は新鮮味を失っているとしても、あるいはむしろそれゆえに、

エリアーデが歩いた土地が見せる変化に富む景色へと読者の目を向けることになるのである。

本書は叢書「宗教学名著選」の第一巻であり、この叢書に選ばれた五名のうち、ただひとり二〇世紀に生まれたエリアーデは、最新の「古典的宗教学者」といえる。読者にとって本書は、エリアーデ的な「宗教」のめくるめく世界を（再び）訪れる契機にもなるだろう。